

国際子ども図書館のサービス  
子どもたちへの直接サービスの意義を中心に -

国際子ども図書館 児童サービス課長  
佐藤尚子

本稿では、国際子ども図書館におけるサービスの現況を概観し、国際子ども図書館の子どもへの直接サービス実施の背景・特徴とその意義を報告する。

## 1. 国際子ども図書館の概況

国立国会図書館国際子ども図書館は、「おおむね18歳以下の者が主たる利用者として想定される図書及びその他の図書館資料に関する図書館奉仕を国際的な連携の下に行う支部図書館として」(国立国会図書館法22条1項)設置されており、基本的役割として、

子どもへのサービスの第一線にある国内外の図書館と連携・協力をはかり、かつその活動を支援し、子どもの本と出版文化に関する広範な調査・研究を支援するナショナルセンターとして機能すること。

子どもたちに読書の楽しさを伝え、図書館や本の世界に親しむきっかけを与えることを目的とした各種のサービスを実施すること。

の役割を有している。

これらの基本的役割を果たすために、国際子ども図書館は以下に述べるような多岐にわたる活動を行っている。(1)～(3)は図書館に来館した利用者へのサービスであるが、2004年度の来館者数は、143,530人。うち子ども(中学生以下)は、21,819人である。また、国際子ども図書館の建物に対する関心は開館当初より高く、定期ツアーの他に予約により、各団体の希望に沿う形で職員が案内する1時間半程度の見学を行っている。

<別紙>2004年度国際子ども図書館サービス統計 1.来館者 2.見学者統計 参照

### (1) 資料・情報センターとしてのサービス(大人へのサービス)

国際子ども図書館は、国立国会図書館法に基づく納本制度によって収集した、国内刊行児童図書(2002年度以降刊行の学校教科書も含む)約19万冊、児童雑誌約900誌のほか、

外国児童図書約 4 万冊、内外児童書関連雑誌約 800 タイトルを所蔵し、各種のサービスを実施している。

<別紙> 2004 年度所蔵統計 参照

### 閲覧サービス

児童書・児童文学の研究者等のために二つの資料室（利用は満 18 歳以上）を設けている。

第一資料室は、日本語による児童書研究のための参考資料、当年度に受け入れた日本の児童図書、現行の学校教科書およびアジア諸国（約 30 カ国）で刊行された絵本・読み物を約 3 万冊開架している。

第二資料室は、アジア諸国以外の外国（約 70 カ国）で刊行された絵本・読み物および外国語の児童書研究のための参考資料を約 2 万冊開架している。機械可読資料等の資料閲覧用機器や拡大読書器も備えている。両資料室では、資料請求により書庫資料も閲覧できる。

### レファレンスサービス

児童書・児童文学研究、児童図書館活動等に関する問合せについて、所蔵調査、書誌的事項調査、簡易な事実調査、文献紹介等を行っている。直接来館の場合は資料室で、文書での場合は最寄りの図書館を経由した郵送・ファクシミリにより受け付けている。

### 複写サービス

著作権法の範囲内で当館所蔵の複写（有料）を来館（後日郵送により製品を受け取る制度もある）及び郵送により申し込むことができる。

### 図書館協力によるサービス

各種図書館への支援を通じて全国の利用者（満 18 歳以上）へのサービスを行っている。最寄りの図書館を通じて当館のサービスが利用できる。

- ・レファレンス・複写サービス 上記のとおり
- ・図書館間貸出し

図書館間貸出制度に加入する図書館内で当館の資料（制限資料もあり）を閲覧できる。

## （２）子どもへのサービス

第 2 章で詳述する。

## （３）展示会等の開催

子どもの本との出会いやふれあいの場のひとつとして、展示会に力を入れてきた。本のミュージアム（3 階）において、さまざまな児童書に関する展示会を開催している。また、ギャラリートークや展示会関連の講演会をホール（3 階）で開催することにより、展示会の趣旨を深める機会の提供に努めている。

また、時宜に応じて、講演会や国際シンポジウムを開催しており、これまでに、「子どもと本と読書 21世紀の子どもたちのために今何をなすべきか」(2000年)、「昔話から物語へ」(2002年)、「国際アンデルセン賞の軌跡」(2003年)などを開催した。

#### (4) 電子図書館サービス

国際子ども図書館の電子図書館機能は、書誌情報及び一次情報を提供するデジタルアーカイブ(下記の )と、電子展示会を提供するデジタルミュージアム(下記の )で構成されている。

##### 児童書総合目録

国内の稀少な児童書の書誌・所在情報の収集および提供を目的とする事業である。大阪国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、梅花女子大学図書館、および東京都立図書館の6機関の参加を得て、館内利用およびインターネットからの利用に供している。

2004年度末現在、図書415,361件、逐次刊行物6,966件の書誌および所蔵データを提供している。さらに、あらすじ・解題、受賞情報などを付加して、専門情報データベースとしての充実を図り、利用に供している。1996年以前のデータについては、昨年度中に投入を完了した。

##### 外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本国際児童図書評議会(『海外で翻訳出版された日本の子どもの本1998』収録データの提供)及び出版社等(新規翻訳出版情報の提供)の協力を得て、外国語に翻訳された日本の児童書に関する出版情報を検索できるデータベースをホームページ上で提供している。このほか、資料室の新着情報もホームページで提供している。

##### 児童書デジタル・ライブラリー

国際子ども図書館で所蔵する児童書の一部(おもに1950年以前刊行のもの)を、デジタル画像で提供している。

##### 「絵本ギャラリー」

貴重な絵本の画像を編集したもので、館内のメディアふれあいコーナー(3階)やホームページで提供している。現在「絵本は舞台 19世紀英国の三人の作家によるお話と童謡と詩の世界」、「コドモノクニ 1920年代の日本 子どもたちを見つめた画家のまなざし」と「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」の三つがある。

#### (5) 図書館協力・研修

##### 国際子ども図書館連絡会議

関連機関との連携・協力をはかるため、国内16の機関が参加する国際子ども図書館連絡会議を開催し、活動状況と活動計画について説明し、今後の当館のサービスについての意見聴取を行っている。

### 学校図書館セット貸出し

子どもの読書活動の推進において重要な役割を担う学校図書館への支援を目的として、2002年11月から学校図書館へのセット貸出しを行っている。その目的は、子どもたちが、本を通して世界の国々や人々への理解と共感を深めることにある。世界各国・地域の歴史や文化、生活等を紹介する資料やその国で読まれている児童書(原書も含む)等、約40冊で一つのセットを構成している。貸出期間は、1セット1ヵ月間で、返却の費用(郵送料)のみ学校図書館で負担する。

現在、「韓国セット」、「北欧セット」、「世界を知るセット」、「カナダ・アメリカセット」、「アジアセット(中国・東南アジア諸国)」(2006年1月から貸出し予定)がある。

### 児童文学連続講座の開催

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員の資質向上、幅広い知識の涵養に資することを目的に、国際子ども図書館が広く収集してきた内外の児童書及び関連書を活用した児童文学連続講座(3日間)を2004年度から開始した。2004年度は、児童文学の中でも内外で最近非常に関心の高い「ファンタジー」をテーマとして取り上げた。

### 研修生の受入れ

国際子ども図書館の業務および児童サービスについて理解を得る機会を提供するため、年間2名程度の研修生を受け入れている。2004年にはフランスからの研修生も受け入れた。

### 人材育成

#### 外部研修

外部の児童図書館員と意見や情報交換をする事でネットワークを築き、全国の第一線でサービスを行っている人たちを支援する国際子ども図書館の基本的な役割を担うため、職員が積極的に外部の研修や集会に参加し、児童図書館サービスの実施に必要な専門知識の修得に努めている。

#### ○人事交流

上記と同様の目的のために、都道府県立図書館や市立図書館等の公共図書館や財団法人東京子ども図書館等との人事交流を行っている。

## 2. 国際子ども図書館における児童サービス実施の背景・特徴とその意義

第1章で述べたサービスに加えて、国際子ども図書館では子どもへの直接サービスを行っている。第2章では国際子ども図書館の児童サービスについて、その経緯も含めて、報告する。

## (1) 子どもの読書をめぐる動き

当施設を児童書の図書館とする方向づけがなされる 1994 年末の頃、「子どもの読書離れ」を憂う政界や民間の活動が大きな広がりを見せ、国立国会図書館にも「国立の子ども図書館の設立」についての要望が相次いで提出された。子ども図書館実現に向けた議論は、新聞紙上も含めた広範な場で繰り広げられた。いくつもの検討課題の中で、館内においても最も関心を集め、時間を費やされたのが、子どもに対する直接のサービスについての議論であったと言ってもよい。要約すれば、論点は以下のとおりである。

第一線の図書館員を支援するためや、職員の研修研鑽の場としても、児童サービスの現場が必要であり、公共図書館の模範となるような児童図書館をつくるべきである。

国が行うべき事業は、子どもが身近なところでサービスを受けられるよう整備することである。

直接サービスを行うと、そこに職員と予算が集中してしまい、本来行うべき資料・情報センター機能を果たせなくなる危惧がある。

当初の館内における検討では、「子どもへのサービスについては、第一線の図書館サービスを支援し活性化させること、及び全国の子どもたちが等しくサービスを楽しむことを原則とする。非来館型サービスとして電子図書館機能を活用しネットワークを通じて、各地の図書館や学校で子どもたちが本施設の持つ資料・情報を利用できるようにする。来館する子どもへのサービスとしては、読書のおもしろさや身近な図書館の世界に親しむきっかけを与える『子どもと本のふれあいの場』として展示、各種イベントの企画・実施や見学等のサービスを行う。」(『児童書センター』(仮称)基本計画)1996年5月)とし、児童サービスについては、限定的なものに留めることを想定していた。しかし、さらに検討を進める過程で、直接サービスを通じて子どもたちの国際理解、異文化理解に寄与することが、役割として加わった。その結果、当初想定されていた「児童書センター」という名称も変更され、1997年1月、「国際子ども図書館」の準備室が設置された。

わが国の児童サービスの「モデル」となることも含め、国際子ども図書館は、児童サービスを行なう人々へのサポートと同時に児童サービスを行なうこととなった。

## (2) 第一期開館における児童サービス

第一期開館時には、企画協力課と資料情報課の二課体制の中、資料情報課に資料情報係と児童サービス係が設けられた。児童サービス係の担当するサービスは、展示、児童書およびその関連資料を用いて行う催物、ミュージアムおよび子どもの部屋の管理運営、子どもを対象とする参観および見学であった。改修の終了した昭和期部分の建物の4階に「子どもの部屋」を設け、(現在はワークルームとして使用)3千冊ほどの絵本を中心とした資料を開架して、2000年5月から、子どもへのサービスを開始した。こ

れに加えて、電子図書館サービスとして「絵本ギャラリー」等を提供し、ホールにおいて、2年間で通算8回に及ぶ展示会を開催した。

これらのサービスは、部分開館という施設の制約もあり、限定的なものにならざるをえなかったが、幸い好意的な評価を得ることができた。全面開館に向けての児童サービスの実施であり、貴重な経験を積んだ2年間であったが、職員の専門職としての能力をどのように開発していくのかということが、大きな課題であった。その課題に対応するため、大きく二つの方法を使った。外部の児童サービスの専門家の受入と、職員の外部研修への派遣である。

前者は、東京都立図書館からの出向により、児童サービスの専門家を3年間にわたり職員として受け入れた。児童サービスの基本は、「本を知る」、「子どもを知る」、「子どもと本を結びつける」と言われるが、国内刊行の児童書を所蔵はしていても子どもへの提供の経験がない当館においては、経験豊かな専門家の存在なしにその出発はありえなかったと言ってよい。

後者については、日本図書館協会が主催する、「児童図書館員養成講座」(児童サービスの現場での指導者の養成を目指す理論から実践までの体系的な研修)、東京子ども図書館の「お話の講習会」(初心者向けのお話の理論と実習)等に継続的に職員を参加させている。

このほか、現在は、外部研修等で得たものを職員の間で共有し、深めるために、「おはなしの練習会」、「基本児童書を読む会」をそれぞれ毎月一回内部研修として行っている。

### (3) 第二期開館における子どもへのサービス

2002年5月、国際子ども図書館は全面開館を迎えた。その年の4月に、児童サービス課が新設され、企画推進と児童サービスの二係が設置された。企画推進係は 学校図書館セット貸出し、児童の読書に関する図書館の活動に対する協力、メディアふれあいコーナーの管理運営をおもな業務とし、児童サービス係は 子どものへやおよび世界を知るへやの資料選定・閲覧・管理、児童を対象とする催し物、児童を対象とする参観・見学をおもな業務とする。児童サービス係の所掌であった展示の業務は、全面開館を機に国際子ども図書館の三課が共通で取り組むこととして、企画協力課に移された。

全面開館に際し、4階の「子どもの部屋」を1階に移設拡大して、「子どものへや」とし、それに隣接して「世界を知るへや」と「おはなしのへや」を新設した。これらの部屋において、2001年秋に策定した「国際子ども図書館全面開館後のサービス実施計画」に基づき、現在、下記に述べる子どもへのサービスを行っている。

### (4) 子どもへのサービス

#### 閲覧サービス

子どものへやでは、長く読み継がれた絵本や読み物、知識の本等を選び、約8千冊を

開架している。これらの資料は、納本等により収集した資料とは別に、開架閲覧用資料として購入等により収集したものであるが、館外貸出しは行っていない。

**世界を知るへや**では、子どもたちが世界に興味や関心を抱き、国際理解を深めることができるようにと世界各国と地域（現在約 120）の地理・歴史・民俗等に関する資料およびその国・地域の代表的な児童文学、昔話等約 1,500 冊を開架している。

また、両室では、国際子ども図書館で開催している展示会に関連したテーマや時宜に応じたテーマにより、小展示を行っている。

### **おはなし会**

「子どものためのおはなし会」

「世界を知るへや」に隣接する「おはなしのへや」で、毎週土曜日と日曜日に、午後 2 時から 4 歳～小学校 1 年、午後 3 時から小学校 2 年以上を対象として定期的に「子どものためのおはなし会」を行っている。内容は、お話、絵本の読み聞かせ、手遊び、詩などを組み合わせた 30 分程度のものである。

「ちいさな子どものための絵本の時間」

毎月第 3 土曜とその翌日の日曜の午前 11 時から、3 歳以下の子どもとその保護者を対象として、わらべうたや乳幼児向け絵本の読み聞かせを主とした会を定期的に行っている。

### **各種行事**

学校の長期休暇にあわせて、科学あそび、ミニ絵本作り、おたのしみ会（人形劇やパネルシアターなど）等の催物を行っている。普段のおはなし会とはまた違った角度から本に関心を持つ機会を提供することをめざしている。

### **見学**

幼稚園・保育園、小中学校、養護学校、外国人学校等からクラス等の単位での見学を年間 50 団体、1,000 人あまりを受け入れている。当館の施設見学のほか、おはなし会も実施して読書の楽しさを伝えるようにしている。小学校高学年から中高生の見学では、調べ学習や職業学習（司書という仕事についての質問等）に対応することが多い。

### **日中韓子ども童話交流**

日中韓子ども童話交流事業実行委員会が主催する「日中韓子ども童話交流事業」を文部科学省、外務省等とともに後援している。同事業は、韓国、中国の小学生を日本に招へいし、日本の小学生と絵本・童話を基軸に交流を行っている。2004 年は、8 月に同実行委員会との共催により、『「日中韓子ども童話交流事業 2004」国際子ども図書館行事』を実施した。

## **（５）児童サービス実施の意義**

国際子ども図書館では、開館以来、上記のような子どもたちへのサービスを行いなが

ら様々なことを学んできた。その意義は以下に要約することができる。

子どもを理解することなどの児童サービスのノウハウの着実な蓄積  
選書業務の重要性の認識とそれを根幹として他の業務への展開が可能であること。  
全国の第一線の児童サービス担当者との良好なコミュニケーションによる図書館  
協力の進展

現在児童サービスを行っている日本国内の公共図書館は、都道府県立 58 館、市区町村立 2,571 館にのぼるが、公共図書館全体の資料費削減、指定管理者制度の導入、人員削減、ボランティアへの対応などの困難な状況の中で、児童サービスを行う図書館員の専門性の保証は十分であるとは言い難い状態である。

国際子ども図書館が持っている重要な役割の一つは、その活動を通して、全国の図書館員の専門性の向上に資するよう努めることである。そのために、当館の豊富な蔵書を活用した研修や講演会などを今後も開催していく予定である。これに加えて、全国の児童図書館員とともに子どもたちに本の楽しさを伝える使命を持ったもの同士、児童サービスの実践についての情報交換や交流をはかり、その中で当館ならではの児童サービスを展開していくことが、ナショナルセンターとしての任務であるのではないかと考えている。

子どもを取り巻く環境が急激に変化している現在、子ども一人一人がそれぞれの成長の過程で読むにふさわしい本との出会いの機会を保障し、本につなぐのが図書館の使命であり、児童サービスの果たすべき役割であろう。この本質的な役割を、国際子ども図書館が自ら果たすことに、大きな意義を見出すことができる。そして、わが国のみならず、諸外国の図書館と連携・協力しながら、一人でも多くの、世界の子どもに、本との出会いの場を用意すること、同時に、世界中の子どもたちに、とりわけアジアの子どもたちに、日本をもっと知ってもらふ活動が、次の目標である。そのことが実現してこそ、国際子ども図書館が、国際理解と異文化理解に貢献する児童サービスの「モデル」と呼ばれるにふさわしい存在となるのだといえる。



< 別紙 >

所蔵統計 (2005年3月末現在)

資料区分				2005.3.31 現在所蔵数		
調査・研究用	図書 (単位:冊)	日本語	児童書	173,400		
			学校教科書	1,295		
			教師用指導書	2,215		
			児童書関連書・参考図書	12,647		
			小計	189,557		
		外国語	児童書	欧米言語	31,091	
				アジア言語	13,143	
			児童書関連参考書	1,827		
			小計	46,061		
			計	235,618		
	逐次刊行物 (単位:タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	929	
				児童関連誌	719	
			外国語	児童雑誌	欧米言語	27
					アジア言語	28
				児童関連誌	欧米言語	71
		アジア言語	6			
小計		1,780				
新聞	日本語	14				
	外国語	1				
非図書資料 (単位:点)	静止画・紙芝居			793		
	カード・カルタ			136		
	マイクロフィルム			52		
	マイクロフィッシュ			28,498		
	音楽資料(レコード、CD、カセットテープ)			596		
	映像資料(ビデオテープ・ディスク)			1,910		
	電子資料(光ディスク、磁気ディスク)			258		
児童サー ビス用	図書 (単位:冊)	日本語	13,222			
		外国語	571			
		小計	13,793			
	逐次刊行物 (単位:タイトル)	22				
電子資料(メディアふれあいコーナー) (単位:点)	148					

## 2004 年度国際子ども図書館サービス統計

### 1. 来館者

月	開館日数	入館者数 (全体)	子ども	1日平均	子ども 1日平均
4月	25	13,068	1,546	523	62
5月	26	15,604	2,201	600	85
6月	25	11,203	1,476	448	59
7月	26	11,489	1,983	442	76
8月	27	15,368	3,179	569	118
9月	23	10,331	1,300	449	57
10月	27	12,855	2,022	476	75
11月	24	13,691	2,055	570	86
12月	22	8,760	946	398	43
2005年1月	22	7,384	1,142	336	52
2月	23	9,919	1,386	431	60
3月	24	13,858	2,583	577	108
合計	294	143,530	21,819	488	74

### 2. 見学者統計

	件数	人数
大人	278件	3,352人
子ども	46件	1,142人
合計	319件	4,306人